「予科練」第481号　令和6年3月1日発行〈隔月奇数月1回，1日発行〉昭和53年7月26日　第3種郵便物認可

予科練

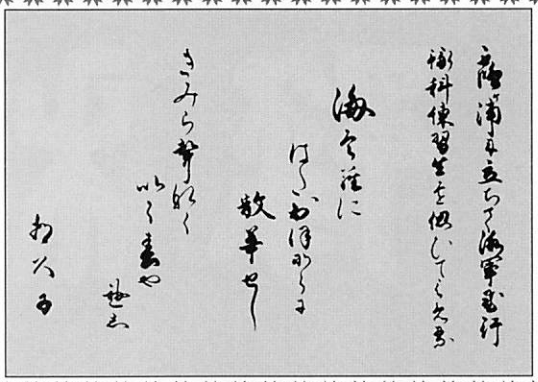
No.481　令和6年

3・4月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.24… 2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…… 3
○第57回予科練戦没者慰霊祭のご案内…… 4
○真珠湾攻撃50周年　たった一人の慰霊祭④…… 6
○彗星未だ還らず或る予科練出身搭乗員の軌跡②…… 9
○香月兵曹を偲んで…… 12
○多田野語録　ほんとうの自分…… 16
○雄翔館見学者所感…… 17
○海原会寄付者芳名簿・事務局日誌…… 22
○お知らせ…… 23

公益財団法人　海原会

無断転載を禁ず



高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行予科練習生を偲びてよめる

海はらに
はたおほそらに
散華せし
きみら声なく
いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑　貴様と俺の碑　No.24

「貴様と俺の碑」は、太平洋戦争において、鹿児島海軍航空隊から多くの若鷲が育って征き祖国防衛のため若き命を捧げた戦没者を慰霊するため、慰霊碑顕彰会によって建立された碑である。鹿児島空は、昭和十八年四月一日予科練教育担当の練習航空隊として、鴨池の地に開隊した。

未だ童顔の残る十六、七才の少年達は、祖国の難を憂いて集い、日夜の寸暇もなく、猛訓練を受けた。その数は、最盛期は、七千名を超え、終戦までに二万余名の若鷲が巣立って行った。

終戦二十年目に甲飛十二期同期生会が北九州市で行われた。そのとき同期生鎮魂の碑を建立しようとの議が起り、飛田元司令の意向で、鹿児島空出身者全体の碑として、顕彰会を結成し、この"碑"が思い出の地に建立された。

碑は、二本の柱で、永遠の平和を祈る合掌と、此れを結んで、『貴様と俺』を表現するとともに、七つボタンと昇天する若き搭乗員のブロンズ像を配する極めて特異な型の碑となった。建立後に碑は移転し、副碑を建立改修工事が行われ現在に至っている。

- ●所在地　鹿児島市鴨池旧鹿児島空跡地
- ●建立年月　昭和四十一年四月十七日
- ●揮毫　勝目鹿児島市長
- ●問合せ　川内市東大小路町六三六　田島米一氏（0996・23・3026）

海軍飛行豫科練習生

遺書　遺詠　遺稿　辞世

遺詠

◎稗田　一幸　一飛曹　高知県　丙飛十三期　二十一歳
神風特攻隊第二御楯隊　彗星
昭和二十年二月二十一日八丈島発進
硫黄島周辺の艦船

にっこりと笑って散り行く戦友の
後に続かん若鷲の意気

◎志村　雄作　上飛曹　山梨県　乙飛十五期　二十二歳
神風特攻隊第二御楯隊　零戦直援
昭和二十年二月二十一日八丈島発進
硫黄島周辺の艦船

幾度の戦を経れど散るときは
御国を守るわれ御楯なり

第57回予科練戦没者慰霊祭のご案内

一　偲ぶ集い

日　時　令和六年五月二十五日（土）午後六時開宴

場　所　L、AUBE　*Kasumigaura*

（土浦市川口二―十一―三十一）

TEL　029―875―8888

会　費　七千円／一名

二　慰霊祭

日　時　令和六年五月二十六日（日）雨天決行

午前十一時（受付九時半開始）

場　所　雄翔園　陸上自衛隊土浦駐屯地武器学校内

（茨城県稲敷郡阿見町青宿一二一の一）

※　受付場所：予科練平和記念館横広場

送　迎　専用バスによる送迎はありませんのでご注意ください。

移　動　関東鉄道バス（阿見中央公民館行）またはJRバス（美浦トレセン行）をご利用ください。

乗車バス停

JR常磐線土浦駅西口バスターミナル①番乗り場

降車バス停

関東鉄道バス　阿見坂下

JRバス　阿見（阿見坂下と同じ場所）

会　費　参加者　三千円／一名（ご同伴者も同額です。）

（会費はお弁当代及び慰霊祭実行のための諸費用として使用させていただきます。）

三　宿泊希望者（宿泊日　五月二十五日）

宿泊先　A　ホテルクラウンヒルズ土浦駅東

料金　七千五百円／一名（朝食付き）

B　ザ　セレクトン土浦駅前

料金（ツイン）　一万五千円／二名

（定員を超過した場合は、偲ぶ集い参加者を優先させていただきます。）

四　参加申し込み方法

※　慰霊祭等の参加及び宿泊を希望される方は、機関誌同封のハガキにより申し込みをお願いいたします。

ご参加等を希望される方のみ、本機関誌同封の返信用はがきに所要事項をご記入の上、切手は貼らずに四月二十六日までにご投函ください。

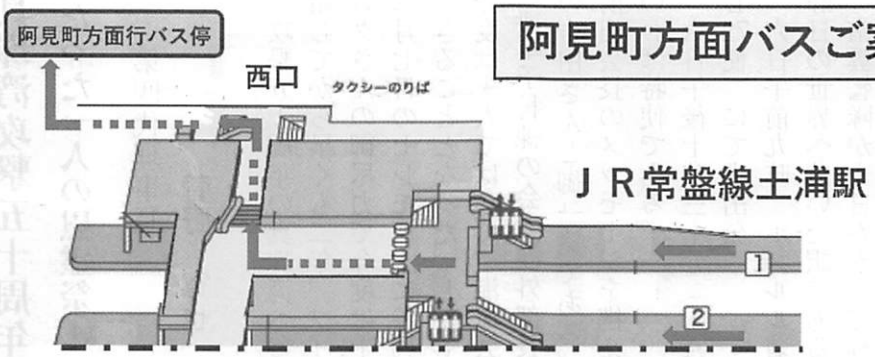
※　慰霊祭では直会は行いません。

式典終了後にお弁当を配布いたしますので、指定場所にて各人ごと個別に喫食をお願いいたします。

連絡先　「第五十七回予科練戦没者慰霊祭実行委員会」

電話　029―886―5400

阿見町方面バスご案内



●関東鉄道バスは「阿見中央公民館行」
ＪＲバスは「トレセン行」にご乗車ください。

●慰霊祭会場最寄り降車バス停は
「阿見坂下」又は「阿見」です。
（関東鉄道バス）　（ＪＲバス）

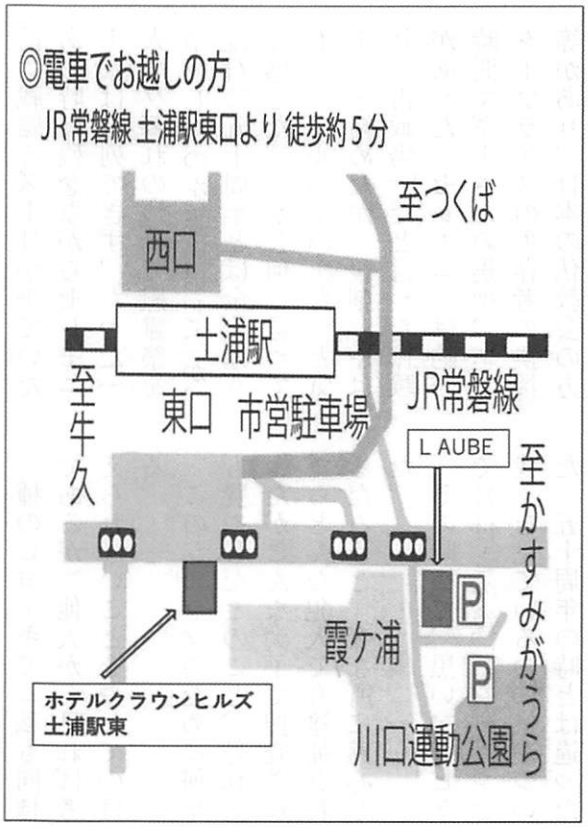
慰霊祭会場は、「阿見坂下」又は「阿見」で降車し徒歩２分の場所です。

バス時刻表	
関東鉄道バス（阿見中央公民館行）	ＪＲバス（美浦トレセン行）
07：30	07：50
08：05	08：00（江戸崎行）
08：20	09：10
08：45	10：35
09：15	
09：45	
10：15	
10：50	

〝偲ぶ集い〟会場案内図

偲ぶ集い会場は、JR 土浦駅東口から
徒歩５分の
「L ‘AUBE　*Kasumigaura*」です。

L'AUBE
Kasumigaura



真珠湾攻撃五十周年
たった一人の慰霊祭④

第四代理事長
菅野　寛也

攻撃五十周年の真珠湾へ参詣してから早くも二年、フィスクさんの御尽力で今度は十二月七日のセレモニーに参列できることとなった。しかも今度は一人ではなく、海原会（海軍予科練の会）渉外部長の吉田さんと御一緒である。前田会長のメッセージを携えいわば特使である。

六日午後十時三十分（JAL72便）にて成田発

六日午前九時　ホノルル着

昨日の世界へ着いた訳である。

南雲艦隊が十日かかって到着した距離を五十年後のジェット機は僅か数時間を要するのみである。

空港には領事館の岩田領事が迎えに来て下さっており、更にフィスクさんも見えて、旅装を解く間もなく御一緒に日本領事館へ向かった。これは「静岡空襲、B29搭乗員の遺品の水筒」が税関のチェックに引っ掛かっては困るので、以前から戸塚進也前代議士が外務省を通じて領事館へ手配して下さっているお陰である。

無精髭のまま失礼とは思ったが「表敬訪問」を済ませた訳である。法眼総領事も「御苦労」と言って下さり、今後の尚一層の御協力をお願いして領事館を辞した。

この日の午後はずっとフィスクさんがエスコートして下さりヒッカム空軍基地の見学、夕食時にデ・ヴィルジーリオさん（ハワイ大学教授）も御一緒になった。

明日（十二月七日）が控えているので就寝しようとしたが、何となく興奮しているためかすんなりとは寝つけない。

しかし、二年前（五十周年）の時とは違いずっと落ち着いた雰囲気である。十二月七日（日本時間十二月八日）早朝フィスクさんの車でパールハーバーへ向かう。アリゾナビジターズセンターの駐車場も満車で駐車スペースを探すのに一苦労。やはり十二月七日だ！　館長のマギーさんもお忙しいのでゆっくり御挨拶している暇もない。

隣接の桟橋に最新鋭の空母CVN―72アブラハム・リンカーンが接岸している。二年前は戦艦ミズーリが来ていた。あの時は残念ながらセレモニーには参列できず、たった一人で夕暮れの桟橋で慰霊祭を挙行したのを思い出したが、流石に五十周年とは全く違うと感じた。しかし何と言っても「パールハーバーだ」と気を引き締めたが、後刻「やはり、古戦場」だと言った体験があった。セレモニーは約一時間マギーさんの挨拶、エンタープライズの生存者の挨拶等があり、日本の仏教会の方の挨拶、最後にフィスクさんのTAPS（タップス）で締めくくられた。

式典終了後フィスクさんとARIZONAへ参詣する迄の時間に、ロバートさん（警察官）が文字通り手作りのパールハーバーのジオラマを説明してくれた。片隅に作者のサインが記入されているが、開戦直前の模型である。建物や樹木迄正確に同一スケールの縮尺である。模型マニアは一種のビョーキで（私も同様であるが）他人から見れば考えられないことをやってのける。

このジオラマのために何年も費やしたとのこと、恐れ入ったがこんな調子で捜査されたらどんな犯人でも逮捕されるだろうと、変な所に感心した。

その時横で、黒いアゴヒゲで目付きの鋭い男がずっと我々を見ているのに気がついた。五十周年の時とは違った

雰囲気だとは感じていてもやはりここはパールハーバーである。一寸これは要注意な男だと思った。案の定しばらく経ってから我々の所へ近付いて来た。吉田さんにワシントンD.C.の「コリアンタワーの碑へ行ったことがあるか？」との質問である。私はワシントンD.C.のベトナムの戦士の碑へは行ったことがあるので勘違いしてつい「イエス」と言ったら「あそこと、ここと雰囲気がどう違うか」と斬り込んできた。「やはり、来たな」と思ったのでブロークンイングリッシュを逆手にとり、「パールハーバーアタックの時は私はまだ子供だったからよく分からない。」と答え、「我々は、慰霊祭に来たのだから」と質問を意識的にはぐらかした。そして静岡の日米慰霊祭の資料を渡しB29の水筒の説明をしたら、驚きをかくせず、完全に黙ってしまった。私と同じ年齢だとのことだがこのような人がいるのも現実である。と言って、だから、何もしないでいたのではいけないと思うし、場所をわきまえなければいけない。

時間が来てアリゾナのセンターでの映画説明の後フィスクさんとアリゾナに向かうボートに乗船する。フィスクさんがマイクを持って挨拶された。勿論、サバイバーズとしてのスピーチである。ドクタースガノ、ミスターヨシダと我々のことも説明して下さったが時々声をつまらせ「声涙、共に下る」の挨拶である。

メモリアルへ着いてから、戦死者の名前が刻み込まれたマーブルルームの壁へ用意された花束、「B29の水筒」を供え、フィスクさんが鎮魂のラッパを吹奏された。そして、B29の水筒に献水の儀である。これで何回目になるのかな？と考えたがやはり緊張する瞬間である。それからが大変で見知らぬレディーにサンキューと挨拶されたり、水筒と一緒に写真をうつして欲しいとか、サインを望まれたりで、帰途の「ボートに乗り遅れる」と催促される始末であった。とにかく、意とする所、日米合同慰霊祭は、ささやかながら実現できた訳である。

午後は、最新鋭の巨大空母アブラハム・リンカーンを見学することができたが、これは文章より写真等をお目にかけた方が良いと思う。そして、次に日蓮宗ハワイ別院を訪れた。ここは住職の小川如洋師がハワイ方面、日本海軍戦死者の霊簿を祀られている所であり、二年前始めて私が前田会長にお逢いした所である。また静岡空襲の日米双方の犠牲者の供養もして頂いたお寺である。ご祈禱の前にフィスクさんが巻紙を取り出され説明された。これは戦死された今井福満一飛曹※一の祖父に送られた小川正一大尉※二がしたためられた手紙である。すると、小川師が「私も同じものを持ってますよ」と持って来られた。全く同じコピーである。遺族からの寄贈であろうがこれを祭壇に供え祈禱して頂いた。これを書かれた小川大尉もミッドウェイで戦死されている。ご祈禱後小川師は日本語と英語両方で説諭された。

翌々日、九日朝からカネオへ基地見学、ここは、飯田房太大尉※三が自爆された所である。

最初、迷彩服の士官が案内して下さったが

「JAPAN AIRCRAFT IMPACT SITE」と

立派な碑が建てられ、飯田大尉の名前も刻み込まれている。花束迄供えられていた。デ・ヴィルジーリオさんが「あの方角から突入して来た」と説明されたが、ゴードン・W・プランゲ博士の「トラ・

トラ・トラ」によれば、被弾して引き返して来た飯田大尉が、兵器員サンズと撃ち合って自爆された地点らしい。更に近くの資料館には飯田大尉の写真や、日本の小さな品々が置いてある。私はそっと零戦のタイピンをお供えして来た。

願わくば、「飯田大尉、零戦をご覧下さい」という気持ちであった。そしてこの基地には海兵と海軍と二人の司令（将官）がおられるとのことで紹介された。立ち話ではあったが当時の敵であった日本の戦士の碑を建てられたことに謝辞を述べると共に「私達も、日米双方の慰霊祭を行っています」と例のキャンティーン（水筒）の資料をお見せしたところ大変喜んで下さった。帰り際に先刻案内役の士官が吉田さんに、「勇敢なる飯田大尉は米軍の新兵教育に大変役に立っている。日本へ帰ったら是非コマンダーに報告して欲しい」と話されていた。

「敵ながら天晴れ」と讃めたたえる武士道は我々大和民族のみの独占ではなく、彼らにもいわゆる「騎士道」精神として存在することをまさに実感として体験した。午後は、ヒッカム空軍基地のヒストリアンを訪れた。

攻撃当日の写真等を見せられたがフィスクさんは「アーミーの写真ばかりでネイビーの写真が少ない」と言われた。半分ジョーク、半分実感であろう。

ここで二年後、終戦五十周年のセレモニーについて方法論や窓口等について良いアドバイスをされたが「貴方達も必ず参加して欲しい」と言われ、責任を感じざるを得ない。しかし、「望む所だ」との決意もできた。ヒッカム基地の建物には日本機の弾痕がそのまま残っており攻撃のすさまじさを物語っている。ヘッドクオーターの建物の中の写真に、二機のP40が二機の九九艦爆を追撃している写真があった。以前に、赤城の古田さん※四に見せて頂いた写真だ。すごい写真だと思ってよく見たら、左下にサインがありこれは「絵」であった。テイラーとウエルチ両中尉の空戦を描いたものであった。絵なのに写真に見えてしまうのも「古戦場」なればこそと思う。残念ながら今の日本には、このような「絵」が描ける人は、いないのではないかと思った。短い時間でこれだけの体験ができたのもフィスクさんを始めとする関係者のお陰だが、今回のツアーは、あくまでも次の目的へのステップである。

終戦五十周年に日米双方の合同のセレモニーを実現させ、「昨日の敵は今日の友」となることが世界平和の一歩となることを切願して止まない。

（昭和十六年十二月八日当時）

※一　今井福満二飛曹　偵察
操練四六期
加賀　九九艦爆
第二中隊第二四小隊
二番機

※二　小川正一大尉　操縦
海兵六一期
加賀　九九艦爆
第二中隊第二四小隊
一番機

※三　飯田房太大尉　操縦
海兵六二期
蒼龍　零戦
第三中隊第一小隊
一番機

※四　古田清人一飛曹　操縦
操練三二期
赤城　九九艦爆
第一中隊第二一小隊
一番機

続く

彗星未だ還らず

或る予科練出身搭乗員の軌跡②

佐藤　剛

第二章　飛練時代（飛行練習生）

【操縦と偵察】

予科練入隊の一年後、適性検査により操縦と偵察のコースに分かれるが、乙飛九期生は二年生になる直前の昭和十四年五月に百里ヶ原海軍航空隊で地上演習機と初歩練習機を使用し二週間に亘り適性検査が実施された。

練習生は誰しも操縦を希望するが、洋上飛行が必須の海軍航空隊の場合、偵察員の養成に力を入れていた。二学年進級時に操縦専修者と偵察専修者に分かれ、教育を受けることになった。

昭和十五年十一月三十日、無事予科練教程を卒業した一九四名は、十二月一日附で第十期飛行術（操縦・偵察）練習生を命ぜられた。既述したが内訳は操縦専修者が八四名、偵察専修者は一一〇名であった。

伯父は偵察専修者となり鈴鹿航空隊で八ヶ月の基礎教育を受け、更に実用機教程で博多空で三ヶ月の実践的な教育を受けることになった。博多空は操縦専修者は水上機の実施教育部隊であり、伯父も水上偵察機で実践的な偵察員としての教育を受けた。実用機教程は十月三十日に終了し、教育終了後十月三十一日に海軍三等飛行兵曹（後の二等飛行兵曹）に任官した。

偵察専修者の場合、実用機教程終了時に二座機（艦爆等）、三座機（艦攻等）、多座機（陸攻、飛行艇等）に希望と適性により振り分けられるが、急降下爆撃を行い、空中戦もできる派手な二座機の人気が高かったと言われる。伯父は艦上爆撃機の偵察員となった。

【偵察員の任務】

空母翔鶴艦爆隊分隊長元海軍少佐でご自身も艦爆偵察員であった有馬敬一氏は戦後の著作の中で艦爆偵察員の仕事について次のように著している。以下要約と抜粋を記す。

「目のまわる艦爆偵察員」

「艦爆は前席には操縦員、後席には偵察員が搭乗する。この偵察員の仕事というのが、まったく目がまわるほど忙しかった。簡単に数え挙げて見るだけでも「航法計算」「無線電信電話の送受信」「暗号の作成翻訳」「旋回銃射撃」「爆撃照準尺計算」等々があり、これらを全て限られた時間内に一人で素早くやらなくてはならない。

航法は、目標が何一つとしてない洋上を飛ぶため、常に照準器で波頭を測って風の方向や強さを出していくが、これが高度や地域で皆違うので厄介だ。また高度計や速度計にしても、高度や温度で実際とは違った値を示すから、その都度修正しなければならない。しかも飛行機はスコールを避けたり雲の上を飛んで、進路も速力もいろいろに変化するものである。これらを全て誤りなく窮屈な機上で計算しようとすると全くややこしくて、慣れない間は今でいうノイローゼになってしまいそうだ。

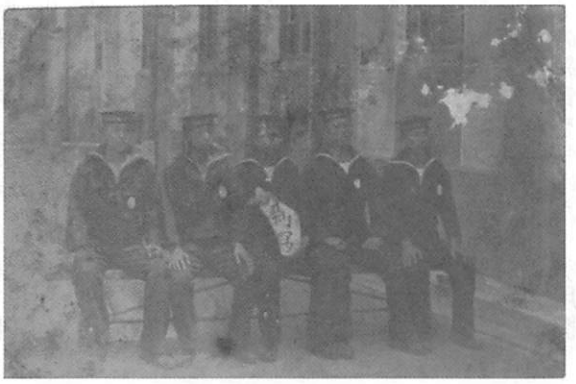
また主要任務である無線は主として短波の電信を使用したが、いざという時の通信がいっぺんに通じないような者は母艦搭乗員の資格がないとまでいわれた。また通報距離の関係上、もっぱら電信モールス信号が使われ、ゆれる機上で一分間八〇字以上の交信

ができるようになるまでには、少年飛行兵に対して大体三年以上の訓練を必要としていた。

また飛行中は常に見張りが肝心であり、水上艦艇が見えないか、敵機が現れないかと目をさらのようにする一方、いざという用意に旋回銃がいつでも射撃できる構えをしている必要がある。

そしていざ爆撃となると、これに近づくまでに測定していた風の強さをもとに、急降下の照準点を計算して操縦士に知らせるのだが、降下角度が変わり、進入針路が違ってくると、降爆の姿勢に入ってから、降下角度計とコンパスを見ながら暗号で修正量を通報する。全く目が回ってうんざりするとはこのこと。」

以上のように偵察員の仕事は多岐に亘り熟練した偵察員になるためには相当の訓練と年月が必要とされた。戦闘行



新潟県出身乙種九期予科練習生（敬称略）
左から皆川彰（昭和18年11月12日コロンボで戦死）
山田一作（昭和20年3月24日沖縄南東方面で戦死）
坂田清一（伯父戦死）
関川文雄（負傷により兵役免除生存）
石塚猛（生存）

高等小学校時代
（後方左端）

操偵適正検査時の伯父
左の写真は前列右端が伯父

3学年（？）時の級友の写真
後列右端が伯父
全員戦死した

動中は位置秘匿のため味方母艦から電波で誘導することはないために、機位を失し母艦に辿り着けなかったケースもかなりあったと推測される。

【飛練偵察練習生の教員となる】

真珠湾攻撃参加後の昭和十七年一月五日、伯父は飛練偵察練習生の教員を命ぜられ、鈴鹿航空隊へ派遣された。ここで後輩の乙種十一期生や十二期生、及び甲飛や丙飛の練習生に十カ月に亘り偵察術の基本を指導したと思われる。

教員時代に伯父は思いもかけず一人の同期生に出会うことになる。乙飛九期生として入隊したが胸部疾患のため二期遅れ十一期生として卒業した国見新太郎さんである。

伯父が直接国見さんを指導したかは分からないが同期生として旧交を温めたと思われる。

続く

(注)乙飛九期出身真珠湾攻撃参加者(敬称略)

氏名	母艦	戦死日	戦死場所
黒木勇三郎	加賀	昭和17年6月5日	ミッドウエー海戦
萩谷幾久男	赤城	昭和19年10月15日	占守島
村上守司	赤城	昭和17年10月26日	ソロモン
繁富悦行	瑞鶴	昭和19年7月25日	九州東方海域
西谷芳藪	瑞鶴	昭和19年3月31日	南洋群島
兼藤二郎	瑞鶴	昭和17年5月7日	珊瑚海海戦
高田忠勝	翔鶴	昭和17年5月7日	珊瑚海海戦

全員が水平爆撃担当の九七艦攻の電信員として参加した。
西谷芳藪さんは山本五十六戦死後、後任となった古賀峯一長官殉職時の搭乗員。

(注)乙飛九期出身真珠湾攻撃参加者(推定)(敬称略)

氏名	母艦	戦死日	戦死場所
益田増雄	赤城	昭和19年3月30日	パラオ南東海域
平山繁樹	加賀	昭和19年10月14日	台湾沖航空戦
島田　直	加賀	昭和17年6月5日	ミッドウエー海戦
島田清守	蒼龍	昭和17年4月4日	小笠原北方海上
佐々木隆寿	蒼龍	昭和20年8月14日	香取基地
清水　巧	飛龍	昭和17年6月5日	ミッドウエー海戦
堂前清作	翔鶴	昭和19年6月7日	岩国基地殉職
大塚孝平	翔鶴	昭和17年5月30日	疾病兵免　公務死亡
野田　実	翔鶴	昭和17年5月7日	珊瑚海海戦
坂田清一	翔鶴	昭和20年7月26日	沖縄方面偵察

上記の10名は待機要員。島田清守さんについてはNHKが令和3年12月8日に放送した歴史探偵「写真で迫る真珠湾攻撃のリアル　若者達は何を感じたのか？」でその日記と共に特集が 組まれた。佐々木隆寿さんは真珠湾攻撃参加者のうち最後の戦死者となった。終戦の一日前である。

香月兵曹を偲んで

中岫（くき） 正彦（乙飛五期）

幻の敵飛行場占領

あの時わたしたちの航空母艦隼鷹は、近藤信竹中将指揮の前進部隊に編入されガダルカナル島北方海域に進出して作戦行動中であった。

一、前進部隊は、ガ島攻略部隊の支援隊となり、ガ島の敵飛行場砲爆撃の任に当たる。ガ島攻略後は機動部隊と合同して所在の敵艦隊を撃滅する。

二、ガ島に敵上陸後、陸軍部隊の奪回作戦は思うに任せなかったが、現在、十七軍司令部と二師団が上陸しており、二十日頃敵飛行場を占領する予定である。

三、この方面に策動中の敵艦隊は、空母二、戦艦二、甲巡五をふくむ三十隻位である。これは、トラック泊地出撃に先立って、旗艦の士官室に集合して連合艦隊参謀から受けた説明の一部である。

日米死闘の場となったソロモン海域で、共に戦いつづけていた私の偵察員、甲種飛行予科練習生第一期卒業の香月一利一飛曹（福岡県出身）が、米空母エンタープライズ爆撃後、グラマン戦闘機との空中戦に機上戦死を遂げたのは、昭和十七年十月二十六日であった。

若し私の転舵が一瞬早かったら彼は現在も生きていたはずであると考える時、私は胸を締め付けられるものを感じ、彼の冥福を祈られずにはいられない。

その二日前の夜、ガ島の陸軍部隊から、

「われに勝算あり」

と自信満々の電波が飛び、私たちは期待感に胸躍らせて吉報を待った。

「われ敵飛行場に突入占領す」

夜半になってこれを受信したわれわれは飛び上がって喜んだ。それは、待ちに待った敵飛行場の占領であり、ガ島の完全占領も時間の問題であると思って、陸軍部隊の健闘に感謝する気持ちで一杯であった。

これで第一の任務が終了したのであるから、今後は何の拘束も受けることなく「敵艦隊を撃滅する」という新しい任務に全力を傾注することができると思った。この敵艦隊の攻撃こそ空母部隊の本来の主任務であるのだから、わたしたちが抱き合って喜んだのは当然であった。

ところが、高速で南進を始めていた前進部隊は、翌日早朝から敵飛行艇の触接を受けて、つづいてB—17爆撃機一機が飛来した。

戦闘機が発艦してこれ等を撃退したが、昨夜ガ島の敵飛行場占領の報が入ったのに、どこから飛来したかと不思議に思っていた時、

「飛行場と見えしは草原の誤りなり」

の報を聞いて唖然とした。何たることぞ、誤りで済まされる問題ではなかった。

前進部隊は、すでに相当南進しており、ガ島の敵飛行場からは好目標になる筈である。

部隊は、反転して北上を始め、隼鷹は、志賀大尉指揮の零戦十二機と山口大尉指揮の艦爆十二機を発進させ、ルンガ飛行場（米国名ヘンダーソン基地）を先制奇襲して全機帰艦したが、この攻撃で被弾した艦爆のうち、一機が翌日の大事な海戦までに整備が間に合わなかったため、私の三番機池田弘一飛と佐藤生一三飛曹は攻撃隊に参加できなかった。

「敵見ゆ、戦艦二、重巡二、軽巡一、駆逐艦一、ツラギよりの方位百六十度百七十海里索敵中の水上偵察機からの電波を受けて、

「状況許す限り、この敵を攻撃すべし」

の命令が各航空部隊に出され、

わたしたちも出撃準備を急いだが、この日は発信しなかった。夜に入ってから、艦隊は反転して南進に移り、次第に速力を増して敵艦隊にせまった。

「本艦は、明朝敵艦隊を攻撃する。飛行機は、全機発進出来るよう完全整備せよ」

艦内スピーカーが高らかに響きわたり、整備員は徹夜作業をつづけた。

「敵大部隊見ユ、
艦艇十五・・・」

明くれば十月二十六日、夜明け前の星空に向かって索敵気が発進した後、二百五十キロ爆弾を積んだ九九式艦上爆撃機十七機とその直援零戦十二機が飛行甲板に並べられた。わたしたち第一次攻撃隊は、搭乗員待機室に入って、敵発見の無電を待った。

「敵空母見ゆ、地点〇〇、付近艦艇七」

「敵見ゆ、空母一、重巡二、駆逐艦四・・」

搭乗員は立ち上がって艦橋前に集り、機付整備員は飛行機に乗って始動準備を完了した。

艦橋からゆっくり降りてきた隊長が、

「二つの空母は同一ものなのかも知れないが、一航戦から第一次と第二次攻撃隊が発進したから、しばらく待機だ。そのうちに新しい空母が見つかるよ。待機室に入ってゆっくり休め」

「隊長さん、又、待機ですかあ、敵さんは二航戦を恐れて逃げたのかなあ」

誰かが冗談をいったので、一同は笑いながら搭乗員待機室に入ったが、一航戦に先陣を許してしまったことを口惜しがる者が多かった。

わたしたちには機動部隊は見えなかったが、隼鷹はこの時敵空母から三百海里以上を南進中で、少し遠かる点が指摘されていた。

「敵大部隊見ゆ、艦艇十五、地点〇〇」

「第一次攻撃隊搭乗員整列！」

艦内はにわかに活気づいた。わたしたちは艦橋前に整列して、艦長の、訓示を受けた。

「この海戦こそ日米機動部隊の決戦であるから、昼戦に引きつづき夜戦黎明戦が行われるであろう。攻撃隊搭乗員は帝国海軍を代表する戦士であるから、各自はこの栄光を自覚し、最善を尽くして任務を全うせよ。武運を祈る」

つづいて、長崎長嘉郎少佐が指示した。

「すでに、一航戦から第一次第二次攻撃隊が出ているから、炎上中の場合は新しい敵艦を狙え。本艦はこのまま南下をつづけ、攻撃隊を迎えに行く。偵察員はもう一度母艦の位置を確認せよ。なお、行動中は戦況の変化に即応するため、無電の傍受に努力せよ」

最後に、艦爆隊指揮官山口正夫大尉が、

「攻撃目標第一敵空母、第二目標戦艦、日頃の実力を発揮せよ。かかれ！」

艦橋に上りかけていた飛行長が振り返って、

「敵空母は二隻になるやも知れず」

と付け加えた時、艦橋のスピーカーが、

「第一次攻撃隊エンジン始動」

と力強く叫び、飛行長は右手を高く上げてぐるぐるまわした。エンジン始動の合図である。夜明け前から試運転を終了して、受け持ちの飛行機からはなれずに待っていた整備員が活発に動き出し、プロペラの轟音が南太平洋に広がって行った。

わたしたちは隙間なく並べられている飛行機の間を縫って愛機に近づき、整備員にお礼をいって機上の人となった。

「上空直衛機格納、急げ」

「手空き総員、攻撃隊見送りの位置につけ」

つづいてスピーカーの声が

流れて、攻撃隊の前方に待機していた零戦六機が手際よく格納され、非番の人びとが飛行甲板横のエプロンに集まって来た。
　母艦は全速で風に向かって直進し、マストに合成風速十八メートルの旗旒信号が揚った。
「攻撃隊発進！」
「ピイッ」
　発着艦係士官の号笛が響き、戦闘機隊長志賀淑雄大尉機から発艦を始めた。艦首を過ぎて左旋回に入ると同時に二番機が発艦動作に入った。
　エプロンに集まった戦友たちがつぎつぎに発艦する攻撃隊の一機一揆に力の限り手を振り、或いは帽子を打ち振って見送っている。先刻まで飛行機のそばで整備員の手伝いをしながら、攻撃隊参加を懇願しつづけていたわたしの三番機池田一飛と佐藤兵曹、予備搭乗員太田満君等や、第二次攻撃隊員たちの顔が見える。
　艦橋には、角田司令官、岡田艦長以下多数の士官が帽子を振って見送っていた。
　私の二番機（小瀬本国雄三飛曹）を最後に全機発艦して攻撃進路に入った時、私の時計は七時を指していた。
　艦爆隊は南々東に針路を定め、高度を上げて三千メートルとした。その前上方には、六機ずつ二隊に分かれた直衛戦闘機が飛んでいる。
　しばらくして数条の白波がこちらに向かってくる。
「あれは機動部隊らしいね」と聞くと、
「ちょっと待って下さい」と声が返ってきた。
「〇七一五、敵大型空母を爆撃炎上させた、と一航戦の攻撃隊が打電しています」
　香月兵曹が喜んで傍受電文を知らせてきた。
「やったか、でも空母はまだいる筈だ」
　等と話し合っている時、前方から三十機余の編隊が近づいてくる。敵の爆撃体である。
「前方の編隊は敵らしいぞ、一航戦にしては早すぎる」
「敵爆撃隊です。グラマンもいます」
　指揮官機の偵察員石井正郎飛曹長が、旋回銃を発射して攻撃隊に注意をうながした。
　左舷を飛んでいた六機の零戦が、高度を上げながら敵の攻撃隊に向かったが、わたしたちは編隊を固めてそのままの針路で敵とすれ違った。
（やれるものならやって見ろ、俺たちもお前たちの母艦をやっつけるから、もし帰っても着艦できないぞ、海水でも飲むがよい）といってやりたい気持ちだった。ややあって香月兵曹が
「前の空母の四十五度四十海里に新空母発見」
「それは難しい。新しい空母がいるからには必ず戦闘機が出るぞ、見張りに気を付けよう不意打ちだけは御免だからね」
　香月兵曹がまた新しい無電をキャッチした。
「今、敵空母は一隻発見の電報があったが、これは先ほどの空母と同じものかも知れません」
「何れにしても敵空母が健在なら、やり甲斐があるぞ。一航戦の奴ら一隻ぐらい残して置け」
　早朝から待機で待たされた以上、二つの攻撃隊を先に発進させた一航戦に対する羨望と、対抗意識が働いていたのは事実であった。
　発艦後一時間四十分、断雲の間に数条の白波の輪を発見した。
「左前方に白波の輪が見えるぞ」
　かすかではあるが、立ち上がる煙が認められた。双眼鏡で見ていた香月兵曹が、
「中央で燃えているのは空母です」
「一航戦がやったのだね」
　近づいてみると、黒煙をも

うもうと上げて停止している大型空母の周囲を全速でまわっている敵艦六隻が見えた。彼らはわが攻撃隊を発見して速力を増し防御砲火を散発的に打ち上げていたが、われわれが近づくと猛烈に発砲して弾幕を作った。

「全軍突撃せよ！」

われわれは第二空母を求めて、四十五度に変針し高度を上げながら進撃をつづけた。飛行高度六千メートルで、予想される敵空母の位置を過ぎたが、敵艦隊が見えない。針路を百三十五度に変針して捜索に入った。およそ二十分経過して、右前方に長い白波の行列を発見した。

「見えたぞ！右前方に艦尾波の行列」

「ずいぶん沢山いますね」

「敵機の見張りを頼むぞ」

敵は高速で直進する大型空母を中心に、十一隻の大輪型陣で、空母の左右に戦艦と重巡各二隻を配し、其の周囲には駆逐艦らしい数艦が護衛している。わたしは、話には聞いていたが実際に航行中の大輪型陣を見るのは初めてであった。敵艦隊の敵前方には積乱雲があり、空母から戦闘機を発艦させながら、雲の下に逃げ込もうとしているように見えた。

輪型陣から少し離れて、艦尾波の短い一隻と、油を流して沈みかけている一艦、それ等の周囲に輪を描いている一隻が見える。この敵も一航戦に攻撃されたのかも知れない。

「突撃準備隊形作れ」

輪型陣の上空は、炸裂する高角砲弾の爆煙で覆われ「天日為に暗し」と言う形容をそのものであるが、敵戦闘機はまだ現れない。

味方の直衛機の姿も見えないが、敵を求めて先行しているのかも知れない。

「敵機が出ませんね。引き起こし後があぶないですね」

「うん、見張りを厳にしよう。投弾前に被弾があったら、そのまま体当たりするぞ」

「はい、しっかりやりましょう」

「全軍突撃せよ」

高度六千メートルから、小隊順単縦陣で接敵運動に移った。雲の下に逃げ込もうとする敵艦隊の中心にいる空母に向かって、弾幕の中に突っ込んで行く姿は、獲物に向かっていく猛鷲のごとく、海の荒鷲とはよくぞ名付けたものである。敵は一斉に急回頭を始め爆弾回避運動に入った。私は、敵の回頭を予想して左に回ってから急降下に移った。雲に邪魔されて時々空母が見えなくなる。照準器の中に、アイスキャンデーのような対空機銃の曳痕弾が交差し、愛機をかすめて行くが、ただ美しいという感じしか受けない。次第に近づく敵空母に照準を定める事に全能を傾けていたが、「二千メートル」の声を聴いた時厚い雲に入った。

「千五百」「千三百」「千二百」

わたしはそのままの姿勢で、じっと堪えながら急降下をつづけた。高度を読む偵察員の声を聞きながら雲の下に出た時、照準器に艦尾が入っていた。少し引き起こして艦橋後部を狙って、「「四百、四百です、あぶない」

と叫ぶ声を聞いてから投弾し、海面すれすれで退避に移った。

「左舷後部に弾着らしい爆発が見ましたが、はっきりわかりません」

と言っているが、目の前に近づく戦艦に気を取られて操縦していたわたしには、弾着を確認する余裕がなかった。

戦艦を過ぎた時、「バサッ」と左フラップに機銃弾を受けた。

「やられましたね、大丈夫ですか分隊士」

「大丈夫だろう、外（敵の射程外の意）に出てから確認しよう」

この時、踏棒にショックを

感じた。方向舵に被弾したらしいが偵察員は気づいていなかった。

「弾着だが、水柱が上がったのか」「いいえ、水柱は立ちません」

「それでいいよ」

初陣の香月兵曹にはその意味がよく理解できなかったらしいが、後でゆっくり説明するつもりでそれ以上話をつづけなかった。今考えると、説明して自分たちの戦果を知らせてやればよかったと惜しまれる。

敵はなおも激しく撃ってくる。長い時間退避を続けているような気がするが、なかなか射程圏外に出られない。敵弾は愛機を包み、豪雨の雨足にも似た弾着波が前方の海面に飛び散っている。あそこまで行けば大丈夫だと思った時敵弾が急に少なくなった。〈おやっ〉振り返ると敵は上空に向かって撃ち上げている。後続機がない筈なのに弾雨の中を急降下する艦爆一機が見えた。この時は、一航戦の新しい攻撃隊が来たものと思っていたが、それが雲に邪魔され命中できないと判断してやり直し、再び急降下して戦艦に命中弾を与えた山川新作、西山強両兵曹機だったと後で知った。

続く

多田野語録

ほんとうの自分

特別会員　多田野　弘

哲人ソクラテスの言に、「汝自身を知れ」とある。ほんとうの自分を知れという意味であるが、人間として最も知らなければならないことでありながら、少しも分っていないのが自分自身である。普通、私たちは自分のことを、私、自分、僕、俺、己などと言っているが、それらの言葉は、一体、自分のどこを指しているのだろうか。

「私」と称している人間の心の中に、二人の私がいるようである。それは、これまで、人間は精神と肉体の結合であり、理性と本能の結合だという見方をしてきた。その結果、一人の人間の中に、理性としての私と本能としての私とがいて、理性のよって、本能を統御し支配しているのだと思っていた。ところだ、本来「私」は一人であるはずなのに意識の上では、理性としての私と本能としての私という、二人の私をつくっているのである。どちらもほんとうの自分ではあり得ない。

では、自分の本体は心かと思うだろうが、心は生れてから自分が作ったもので、コロコロかわる。心の大部分を占めている理性も、2、3歳頃から言葉を覚え、言葉を事実に結びつけていく作業を通じて、考える能力を身につけ、自分がつくり上げたものである。だから、心も理性も合理的にしか考えられない不完全なものなので、「私」の本体であるはずがない。

すると、この身体・肉体が自分を表していると思うだろうが、肉体を構成する六十兆個の細胞は、6か月から3年の間に全部生まれ変わっている。ゆえに、身体は3年毎に別人になっているので本当の自分とは言えない。心も身体も自分の本体でないとすれば、ほんとうの自分は何なのか。

當て、もしかすると自分の本体は魂ではないかと思った経験が私にある。その一つは、昭和十八年末、南方の最前線ラバウルでの出来事である。彼我の戦力の差が日増しに大きくなっており、このまま推移するなら、そう遠くない内に自分の死が免れないことを、下級兵士の私にも、感じられた。ある夜、疲れて眠っていたが、心の奥から「びくびくせずに潔く死ね」という声が

聞こえてきた。魂の叱声だった。ハッとして、「そうだ！自分の死は祖国に捧げた崇高な行為であり、男子の本懐だ」と思うと、躊躇することなく死を受け容れることができた。それ以来不思議にも、飛び交う弾雨の中を平気で動き回れるようになった。

さらに魂の存在を見たのは、最後の戦場フイリピンである。昭和十九年十月、わが軍は窮余の一策として、ゼロ戦に爆弾を抱かせ、敵艦に突っ込むという、比類ない特別攻撃隊の編成が決まった。その第一回に、わが２０１航空隊が選ばれた。出撃の日「総員見送りの位地につけ」が令され、第一航空艦隊司令長官・大西瀧治郎中将と水杯を交わした特攻隊員の出撃を厳粛な気持ちで見送った。意外にも、目の前を過ぎてゆく彼らの顔は、晴れ晴れとしており、しかも凛として輝いて見えた。もうこれは人間業ではない、神の化身かと見紛うほど神々しく感じられた。彼らも私と同じ、死を受け容れたからだと思うと、震えるような感動を覚えた。私も続いてフイリピンの土になろうと心に誓った。

二度の強烈な体験から、自分が魂の存在であることを知ったが、私の推測であり、早合点かもしれぬと思っていた。ところが、魂こそが、ほんとうの自分なのを証明した哲人がいた。その一人、精神医学者ビクター・E・フランクルの書「夜の霧」が、魂の存在に触れている。彼はナチスのユダヤ人狩りによって、アウシュビッツの捕虜収容所に入れられ、夫人はガス室で殺されるが、彼自身は幸運にも虐殺を免れた。彼は収容所の中で、人間が限界ぎりぎりのところに置かれたとき、人間がいかに行動するものかをまざまざと見た。囚人たちは、収容所の役人に追い立てられて仕方なくガス室に死に逝くのが普通であった。

しかし、中には敢然と国歌を歌いながら死に赴いた者がいるし、祈りを唱えつつ従容として死についた者もいる。若者の身代わりになってガス室に入っていった老人もいた。また、たださえ足りない自分のパンを、病人の枕元にそっと残して作業に出ていく者もいた。彼はこれらを見て、こういう尊い意識は人間のどこに宿っているのだろうかと考えた。理性や本能の衝動的無意識であるはずがない、その層の下にある超越的無意識がそうさせたのだと考えるに至った。私たちが昔から呼び習わしている「魂」のことを言っている。

もう一人の哲人は、ロシアの文豪トルストイである。彼の書「人生の道」に、「魂は肉体に宿り、心と身体を統御し支配する」と断言している。諺にも「心を主とする勿れ、心の主となれ」がある。人間にとって、魂が主人で、心は、魂の具体化に必要な手段・道具の従者だという。

戦後、二人の先哲の書から、私自身が魂の存在であるという考えが、ゆるぎないものとなった。私の価値観・世界観は一変し、人生をつくる言動力となっている。自分をコントロールできる克己の快感は、何にも代え難い勝利の喜びとなり、私の可能性追及の牽引力となって次々と困難を克服していった。「ほんとうの自分」を知ったことが、今日の百二歳の私をつくったといえる。

続く

雄翔館見学者所感

家族を守るために予科練に行った生徒もいると知って、なんだか同じ年の人とは思えないと思うくらいしっかりしていて、自分も頑張って家族に恩返しがしたいと思った。

ここから犠牲になってくれた人のお陰で、今生きていることを知り、「ありがとう」と伝えたい。

令和五年五月
住所不詳　濱田様(中学生)

自分の身を犠牲にして日本を救ってくれて感謝している。雄翔館に飾られている話と白虎隊の話を照らし合わせると何か気付きがあるかと思う。自分の将来の夢は医師だが、自分の体力を優先ではなく、他人（患者）を優先、大切にする心が重要で、後に自分に返ってくるものなのかなあと感じた。山本五十六についても調べたい。事前学習のレポートと比較してみて、新たな発見や改めて理解できる内容があるのかなと思った。

また、飛行機にも様々な種類があり、とても興味をもった。

令和五年五月
住所不詳　須賀様(中学生)

今日、見学させていただいて、国のために戦ってくれた人々がたくさんいたからこそ、今の私たちが楽しく暮らせているんだなと思った。私たちのために戦ってくれた人がいるからこそ、平和な生活を送れていることに感謝し、今後の日本のために活躍する人になりたい…。

令和五年五月
住所不詳　遠藤様(中学生)

英霊の方々がこの日本の為に自身の身体を盾に戦ってくださったことに感謝してもしきれない思いです。今、日本は窮地に立っています。政府は、腐敗しており、日本人の血税は一パーセントのエリートや外資に流れて、外国のいいなりです。日本の子供達の未来を考えてくれていない。遠い空から見守ってくれている英霊の方々はどのような思いで見ているのでしょうか。申し訳ない気持ちでいっぱいです。日本国民が「何かおかしい！」と目覚めなければ、もう日本の未来はないと思います。次は、靖国神社に行って、心を清めて来たいと思います。本日は、良い時間を過ごせました。ありがとうございました。

令和五年五月
石岡市　花和様

予科練平和記念館は、四度目の来館となります。私は、現役会社員として従事していた頃、現在で言うところのセクハラ、パワハラ、男女差別、シングルマザーだったということもあり、「だから女はダメなんだ…！」と何度も言われ辛い思いをしてきました。うつ病と思われる症状にも悩まされました。そんな時、平和記念館のことを知りました。また、『人生に迷ったら知覧に行け！』という本を読みました。

戦争で命を落とした方々は生きる道の選択さえできなかった！私も私が今出来る事をしようと思いなおしました。

何度来ても特攻ブース（最後）では涙がとまりません。そのまま雄翔館でも泣いてしまいます。

令和五年五月
神奈川県藤沢市　鶴田様

ここに来るのは、五回目です。ここに一人で居ると英霊の方の崇高な雄叫びが聞こえてくるような気がします。

私のオヤジは、十六歳で志願して軍隊に入りました。幼い兄弟六人を残して、軍隊に入る。

オヤジの心中と二度と会うことがないであろうオヤジを見送る祖母の心中を想うと胸が張り裂けそうです。軍隊では、消灯後、薄暗いトイレで勉強して憲兵の試験に受かり、中国に転属になりました。

憲兵の訓練は、過酷で命を亡くす人もいました。オヤジ

の原隊は、昭和十九年十月のレイテ　の戦いで全滅してしまいました。自分だけ生き残ったということ重い十字架を六十八歳まで背負うことになりました。終戦の五日後、オヤジは約一五〇〇名の中国共産党軍に包囲されたあと攻撃を受けました。対する日本軍は、民間人と合わせて四十名位でした。中学生位の少年が、「僕が様子を見てきます。」と言って出発して行きましたが、生きて戻ることは叶いませんでした。その時、一人の若い女性が自分は最後まで包丁で戦うといいました。死に対し、一点の曇りもない潔さにオヤジは深い感銘をうけました。

戦いが終わりを迎えた頃、彼女のものと思われる地獄の底から沸き起こるような気高い雄叫びが中国の空に響き渡りました。薄れゆく意識の中で彼女は何を思ったのでしょう。敵の首にしがみついてやろうと思ったのでしょうか、それとも祖国のことでしょうか…。

令和五年五月
東京都日野市　　山口様

両親を想い又国、兄弟を想い全てを守る為に覚悟をなさり散っていった方々に涙がとまりません。そして、今平和で有る事を皆様に感謝申し上げます。

数年前に父が戻りました舞鶴港に娘、主人と行って参りました。父は、昭和二十六年にシベリアから戻り、舞鶴は私の原点になります。父は、アメリカが嫌いでした。

三十年前に亡くなりましたが、私は娘にアメリカの高校を卒業させました。父が生きていたら何と言ったでしょうか？

アメリカのホームステイ先では、娘に大変優しくしていただきました。

戦争はいかなる場合もどちらの国の平和も壊します。現在のキナ臭い状況を憂います。

父は、アメリカよりロシアが嫌いでした。ロシア人も一人一人は良い人なのに国となるとモンスターになるそうです。

令和五年五月
神奈川県川崎市　田辺様

初めて息子と雄翔館を見に来る事が出来て良かったです。言葉が出ないほど驚きと、昔の戦争の事などを見て感動してしまいました。

また来てみたいと思いました。

令和五年五月
河内町　　藤間様

今日この日に、この地を訪問出来て予科練先輩の皆様にお会い出来たことを喜び、その勲を偲ぶことが出来ました。海軍航空隊の中核としてこの予科練制度が発足して十数年、いかに多くの戦功を挙げられたことに何度訪ねても感激致します。本日、展示内だけでなく、上の遺影のお一人お一人の顔を見つめていたら、「後を頼むぞ、俺達のことを決して忘れないでくれ」と言われた気がして、自然と「五省」が頭に浮かびました。

「仰ぐ先輩、予科練の～」と歌に謡われた先輩達のことを思って、これからも前を向いていきます。

また伺います。

五月二十七日海軍記念日に…。
令和五年五月
神奈川県横須賀市
長谷川様（元海自）

今の時代は、幸せだなと思った。昔の気持ちが分かった。お母さんに会えないなんて、可哀想と思った。

令和五年五月
住所不詳　　入江様

遺族ではないが亡くなった人達の無念は現在の今も解ります。今の日本の繁栄を築いた人達です。三回目ですが、

涙が出る程悲しいです。

令和五年五月

（住所・氏名記載なし）

こちらに展示されている予科練生たちは、父母に感謝の気持ちを忘れず、一片の曇りもなく命を捧げていたものと思います。しかし、中には入隊してから二年程度で戦死した方もいるようです。十分とは考えにくい飛行技術で敵の砲撃をかわした上で本来の目的が達成せられたのか甚だ疑問です。そのような方に作戦を命じた指揮官、技術のレベルを知っていたであろう教官、こういった方々の置かれた心境も展示していただきたいと感じました。

（日付・住所・氏名記載なし）

海原会の皆様、ありがとうございます。三人の子供達、遺書や遺品、兵隊さんたちの御魂を感じる機会をいただけたことに感謝です。

学校教育では教われない大事なことを学べる場所を守ってくださっていることがありがたいです。

次の世代に親として伝えていきたいこと、いくべきことを改めて感じました。大和の心、大和魂、家族や子孫の為に命を捧げてくださった生き様、子孫にとってこれ以上の愛はないように感じます。今の子供達の心の支えになると思います。

令和五年六月

茨城県常陸太田市　山崎様

多くの戦没者の思いの上に今の我々が存在していることを感じます。彼らは、家族のため、後孫のため、日本国の未来のために命をかけて戦ったという清々しい気持ちで今の我々を見ている。決して自らの運命を憎んではいないと信じます。そして、その思いに応える責任が自分にもあると考えます。

令和五年六月

茨城県つくば　鈴木様

貴重な資料を拝見、拝読させていただきました。ただただ皆様、英霊のご冥福をお祈りするばかりです。

ありがとうございました。

令和五年六月

埼玉県所沢市　藤野様

予科練生たちの「本当の声」を知れて、とても貴重な体験ができました。実際の字を見れて良かったです。貴重な資料がたくさんありました。

ありがとうございました。

令和五年六月

竹園東中学校　学生

戦争で大変多くの命を亡くされている方々の遺書、遺品を見て、とても胸が痛みました。この雄翔館を見学して、とても良いことだけを学べると思いましたが、そうばかりでないことも学んで、戦争での命の尊さを改めて思い知らされました。本日は、見学させていただき、有難うございました。

令和五年六月

竹園東中学校　学生

あなた達のおかげで、今日の日本があります。ありがとうございます。

（日付・住所・氏名記載なし）

現在の幸せな日常はあなた方のお陰なのですね。病気をして、少し気が沈んでいましたが、精一杯生きようと思います。

ありがとうございます。

令和五年（日付記載なし）

千葉県　斎藤様

栃木県から参りました

一度、来館した時は忙しなく見てしまいましたが、今回はゆっくりと時間をかけて見て参りました「国の為、家族の為」と「怖い」「嫌だ」と

一言も無く飛んで行った方々の事を思うと涙なくしては見られませんでした。
自分の事よりも、父や母、兄弟達の事を心配して筆をとる心境を思うと心が痛みました。彼らの尊い行動があってこそ、今、日本が平和なのだとつくづく思いました。
令和五年七月
栃木県鹿沼市　匿名希望

長野県から参りました。本日来館したのは、私の祖先のお墓参りをする中で、幼少期から大東亜戦争で亡くなった方のお墓があり線香をあげ続けて来たからです。先日何気なく、何方のお墓かと見たところ、第四神雷攻撃隊で一式陸攻に搭乗され一九四五年四月十四日に亡くなられたことを知りました。今日ここに来れたのは、その方が連れてきてくれたのかなと思っております。雄翔館を訪れ感じたのは、戦時中であっても若者の青春があったのではと感じました。一日一日を生ききる、誰かの為、家族の為、久野の為、色々な思いで旅立って行かれたのかなと感じました。来週は、鹿屋に行って多くの事を感じて、多くの方に伝えようと決意しました。
ありがとうございました。
令和五年七月
長野県諏訪郡　青木様

日本の歴史が続く限り、この戦争をしっかり語りついでいって欲しい…。
令和五年七月
住所不詳　野田様

前回は時間がなくゆっくり見ることが出来なかったので、一週しか経っていませんが、また来ました。ご家族に充てたお手紙には、ご両親への感謝の気持ちや親不孝を誤るものが多く、今自分が祖父母、両親と一緒にいられることの有難みを強く感じました。また、手紙から彼らの心の奥には戦いへの怖さも読み取れたきがしました。怖くないわけがないでしょうし、もっともっと生きたかったと思います。今、こうしていろいろありますが、生きて生活していることを当たり前と思わずしっかりと生きようと思いました。
また来ます。
令和五年七月
茨城県牛久市　会社員

今日、ここへ来て改めて戦争はやってはいけないと思いました。特攻出撃する人たちはとても笑顔でした。自分はああではいられません。そう考えると兵士たちはとても勇気があったんだと思いました。あの人たちの本当の思いは笑っただけなのか、怖かったけど最期まで笑っていたかったのかが不思議です。とても勉強になりました。
令和五年七月
千葉県船橋市　赤木様

昨年五月に来た時、あまり時間なく、もう一度ゆっくり再館したいと本日願い叶いました。
沢山の尊い命が犠牲になり、胸が痛く涙が止まりませんでした。国の為に命を亡くすのは正直な自分の気持ちを押し殺しての覚悟だったでしょう。ご両親達、兄姉妹、死して…何も生まれません。悲しみだけがいつまでも残ります。
今の日本の国を思うとこの若き特攻隊で散華した魂に恥ずかしい出来事がいっぱいあります。よき国づくり、平和な世界になる様、ひとり一人が平和の連鎖になる様、心づくり、日々願います。
令和五年七月
大阪府池田市　河見様

徳山の回天記念館でも泣でしたが、こちらでも泣でした。
若くして死ななければならなかった予科練生、やはり死

は怖かったと思う。　泣
令和五年七月
千葉県緑区　吉井様

アメリカから娘家族が三年ぶりに帰国。孫に色々な場所を見せたいと初めて来ました。なかなか来る機会はありませんでしたが良い体験が出来ました。戦争は、二度と起こしたくないし、日本は平和ボケです。この時代に、ウクライナ、ロシアの戦争なんてあり得ないと思います。本当に二度と若者達にこういう事は味わってほしくないです。
（日付・住所・氏名記載なし）

戦争は、思ったより悲しく、怖く、恐ろしいということが分かりました。もう二度と戦争が起きてほしくないです。
令和五年七月
アメリカ　八歳

子供と一緒に来ました。家族の事を思いながら、彼らの手紙を読むことは胸が締め付けたれる思いでした。このような形で後世に残してくださったことに感謝して平和についてこれからも考続けて行かなければならないと思います。
令和五年七月
住所・氏名記載なし

夏休みの自主勉強として来させて頂きました。写真とか撮れないのは残念でしたが、自分の記憶の中にしっかりとおさめます。こういう若い人たちが今後の国のために命をかけてくれたのに、今でもまた各国では戦争の話が出ていたり、実際戦争していたり…。この方たちに申し訳なく思ってしまいました。
この方たちがいたから平和があったのだと感謝し続けて行こうと決めました。
ありがとうございました又来ます。
令和五年七月
川口市　渡辺様（小五）

（公財）海原会寄付者芳名簿

（敬称略）（単位千円）

一〇　六車　昌晃（一般）東京
一　伊勢川嘉也（甲16）和歌山
五　岩澤　末三（甲14）東京
一〇　植田　早苗（非会員）兵庫
五　遠藤　五六（乙20）福島
一〇　都築　倍彬（甲13遺）大阪
五　清水香代子（一般）愛知
五　タカハシトヨアキ（非会員）不明
五　㈱小笠原荷役商事（一般）埼玉
五　萩谷　元男（乙9遺）茨城
四　永光　頼光（甲16）熊本
一　堀越　雅子（一般）東京
一〇　ファンデルドウース瑠璃（一般）広島
五　谷川　諭（丙2遺）長崎
一〇　佐々木真悦（一般）茨城
五　藤原　耕（一般）大分
五　米田　恒貞（乙18）京都
五　水本　滋信（乙23）兵庫
五　野口沙友美（非会員）群馬
五　山口　泉（一般）東京

海原会へのご芳志
誠に有難うございました。

事務局日誌

十一月
二日
（株）日本立体訪問
於（株）日本立体
菅野名誉顧問が、実物大零戦模型製作依頼のために同社を訪問、平野理事が案内した。
四日
阿見町イベント支援
於　雄翔館
阿見町主催の「れんこんマルシェ」において、阿見町観光ガイドが行った雄翔館の案内を平野理事が支援
編集会議
機関誌（一～二月号）の編集会議を、ZOOM会議で実施した。

参加者　塚理事、平野理事、工藤会員、原会員

五日

ジュニアバドミントン

於　阿見町中央体育館

星指副理事長と平野理事が出席した。

七日

陸上自衛隊生徒案内

於　雄翔館

陸上自衛隊生徒の雄翔館研修を平野理事が支援した。

十一日

ＵＴＫ代表取締役来局

於　事務局

雄翔園池水質浄化装置取り付け契約会社代表が現地確認のために来局

十二日

武器学校開設記念行事

於　武器学校

安井理事長が参加した。

二十五日

海原会会員来局

於　雄翔館

新入会員の田中様が挨拶に来局　平野理事が雄翔館を案内した。

二十七日

巻島評議員及び六車顧問来局

於　事務局

事務局業務指導のために来局された。

原監事業務指導

於　事務局

原監事が平野事務局長と意見交換のために来局した。

二十八日

三者会同

於　事務局

予科練平和記念館長、阿見町観光ガイド会長、平野事務局長で意見交換を行った。

十二月

二日

海原会広報ＰＲ

於　予科練平和記念館

同館で開催された講演会の終了後に、行方事務局次長が海原会の広報ＰＲを行った。

四日

雄翔館現況調査

於　雄翔館

展示品等の現況調査を平野事務局長と行方事務局次長が実施した。

七日

所蔵庫現況調査

於　海原会所蔵庫

武器学校広報班隊員の支援を頂いて、平野事務局長と行方事務局次長が現況調査を実施した。

十三日

雄翔館清掃作業立会

於　雄翔館

阿見町シルバーセンターが行う雄翔館の定期清掃に平野事務局長が立会した。

十六日

十二月理事会

於　事務局

出席者　安井理事長、星指副理事長、篠田理事、山下理事、塚理事、原監事、行方参与、平野事務局長

【お知らせ】

海原会機関誌「予科練」では会員の皆様からの投稿記事を募集しております。

・同窓の方の思い出
・予科練・海軍に関わる事
・慰霊・顕彰への思い
・海原会へのご意見
・「予科練」へのご意見　等

お気軽にお寄せください。

【原稿のお送り先】
〒300－0301
茨城県稲敷郡阿見町青宿489－1
慎輝ビル　3階
公益財団法人 海原会　事務局
電話：029-886-5400
E-Mail:y-hirano@yokaren.jp

「予科練」第481号3・4月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可（隔月奇数月1回1日発行）
令和6年3月1日発行
編集人　塚　純一
発行人　安井　剛
発行所〒300-0301
茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1（慎輝ビル3階）
公益財団法人　海原会
郵便振替　00140-9-54332
FAX☎〇〇二九-八八六-五四〇〇
〇〇二九-八八六-六四〇〇
定価500円

海原会会員の皆様へ

小さくてもあたたかい
一日葬
家族葬

お客様満足度 99%※
※当社施行客アンケート調べ

自宅葬、一日葬、お別れ会のほか、ご希望に合わせたお葬式プランがございます。

お葬式のご依頼や「もしものとき」に備えた事前のご相談年中無休で承ります

相談見積無料

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

お墓
お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。

墓所工事
標準価格（10万円以上）の
10%割引
サービス提供エリア：関東・関西・東海

「お墓のお引越しガイド&事例集」
無料で資料を差し上げます。

お葬式
葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。

葬儀
祭壇標準価格の
20%割引
※一部斎場、一部商品は除く。新花で送る家族葬は優待料金
サービス提供エリア：関東

「お葬式の流れがわかる100項目」
無料で資料を差し上げます。

お仏壇
仏壇店は首都圏に2店舗（国分寺・千葉）。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。

仏壇
店頭価格の
25%割引
※ただし、催事特価品と仏具小物、手元供養商品は対象外
サービス提供エリア：関東

「お仏壇カタログ」
「特選 お位牌」
無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは海原会事務局へ 029-886-5400
お問合せの際は、「予科練を見た」とお申し出ください。

MAO MEMORIAL ART OHNOYA
メモリアルアートの大野屋
http://www.ohnoya.co.jp